

ペットボトルハウス

～非建築部品を用いた建設の可能性～

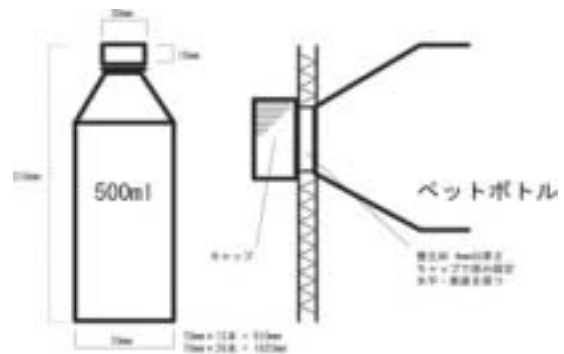
奨励賞・特別審査員賞

東京電機大学 情報環境学部 情報環境デザイン学科



川村 匡平

今日、環境問題に関して建築では、廃棄物の削減、材料の再生等が課題である。そこで、誰でも作れる再生可能材料による住宅のプロトタイプを考案、試作した。身近なものを再生し、住み手が作ることで、資源の循環に貢献できると考えたからである。これまでの非建築部品を用いて作られた建物の事例を整理すると、技術的に高度か、一回しか作れない作品の2種類が多い。ここでは、住み手が作れて同じものを誰でも作れる、一般性をもつ方法を追求することにした。新たに部材を生産するのではなく、身近にあるペットボトルと、建築工事現場で使用される養生材（ダンプレート）を転用し、1.8㎡の住空間を構築した。オフィスや避難所のブース、パーティションなどの用途で屋内利用が可能である。



講 評

近年の環境問題の中で不法投棄される廃棄物のほとんどが建築廃材という状況から、建築とは大量の廃棄物を伴い環境を破壊する要素をもった行為でもあることを自覚せざるを得ない。作者は廃棄物の削減、材料の再生が建築での課題であるとして、再生可能な材料で住み手自らが作れる一般的な方法を提案しようとした。選んだ材料がペットボトルとダンプレートというのもいかにも現代的で面白い。プレゼンテーションでも飲み物の銘柄ごとに記録されたペットボトルのサイズなど、普段は建築的なデータとは考えもしない数値が並んでいたりしてユニークさとユーモアが楽しかった。テーマとしては重く社会性のある問題を取り上げていながら、インパクトが弱かったのは、選んだ素材のせいかな？断熱性や加工性の良さに着目したことは想像できるが、人の安全・安心のための建築に用いる素材としては頼りなさ過ぎた。しかし、作者も多分そのような点は自覚していて、あえて話題性を求めた結果のようにも思える。環境に負担をかけない建築のあり方は、アプローチの仕方も方法も様々に模索されているが、建築を学び、その出発点で建築の持つ加害性を自覚した作者の視点は評価されて良い。将来の作者には、美しい建築と環境の両立を目指して活躍されることを期待したい。

[審査員 稗田 忠弘]